



「足を洗う」

2025 年 6 月

高校教頭 慎 繁範

イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。

(ヨハネによる福音書 13 章 3～8 節)

「足を洗う」という表現を聞いたことがあると思います。一般的には、「悪いことから足を洗う」、つまりそれまでの良くない生活や習慣を断ち切る、という意味で使われます。たとえば、ギャンブルにはまっていた人がそれをやめた時、「彼は足を洗った」と言いますよね。この言葉のルーツは仏教にあると言われています。修行僧たちは裸足で外を歩き、寺に戻るときは、泥で汚れた足を水で洗ってから建物に入ります。ただの洗浄ではなく、「心の煩悩を落とす」意味合いも込められているそうです。いずれにせよ、仏教においては、自分で自分の足を洗うことが原則と言えます。

ところで、先日亡くなられたローマ・カトリック教会のフランシスコ法王は、イタリアの刑務所に出向き、みずから受刑者の足を洗ったことがあります。これは、イースターの前の「聖木曜日 (Holy Thursday)」に行われる儀式だそうですが、カトリックでは一番上に立つ人が罪人の足を洗っていることになります。なぜ、このようなことを行うのでしょうか。

イエス・キリストは、十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の食事をしました。いわゆる「最後の晚餐」です。その夕食の後、意外なことが起こりました。イエスが弟子たちの足を次々と洗い始めたのです。当時の人々は素足にサンダルで道を歩き、足はいつも埃や泥で汚れていました。その足を洗うのは、奴隷のような最も身分の低い人の役割でした。それなのに、イエスは率先して弟子たちの足を洗い始められたのです。

イエスは、弟子たちから「主」と呼ばれていました。また「先生」とも呼ばれていました。そこで、弟子の中には自分の先生であるイエスに足を洗ってもらうなんてとんでもないと考え、「わたしの足を決して洗わないで下さい」と懇願する者もいました。しかし、イエスは弟子たち12人全員の足を洗われたのです。その中には、イエスを裏切ったイスカリオテのユダも含まれていました。そして、弟子たちに語られたのです。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」 イエスは、身をもって弟子たちに、「互いに足を洗い合う」よう、手本を示されたのです。このイエスの行為には様々な意味が含まれていますが、ここでは2つお伝えしたいと思います。

1つ目に、上に立つ人が率先して仕えるということが大切だということです。このイエスの姿は、真のリーダーシップが権威の行使ではなく、他者への愛と奉仕にあることを明確に示しています。リーダーが率先して仕えることで、共同体全体に奉仕の精神が広まるのです。これは、あらゆる共同体の健全な成長と結束に不可欠です。現在でも、企業などで上に立つ人は全体の奉仕者であるという考え方、「サーバント・リーダーシップ(奉仕するリーダー)」を実践して成功している人が多数います。

2つ目に、自分を裏切ろうとしている弟子に対しても、イエスは愛を示されました。過ちを犯した者を責めるのではなく、むしろ赦すこと。憎しみを抱かせる相手に対しても、憎しみを増幅させるのではなく、愛をもって応じること。それこそが、イエスが示したことです。人の心の汚れは、裁かれることではなく、赦され、愛されることでしか清められないものなのです。

イエスの行為は、単なる謙遜のしぐさではなく、神がどのようなお方であるかを可視化したものでした。神は人を支配する方ではなく、へりくだって罪にまみれた私たちに仕え、汚れた部分をみずからの手で清めてくださる、驚くべき愛の神なのです。その愛は、すべての人の罪を贖う十字架のわざによって完成されました。私たちは同じような究極の自己犠牲を成し遂げることはできませんが、イエスに倣い、互いに仕え合う者として歩んでいきましょう。